



MUSASHINO^{Vol. 131} *for* TOMORROW

巻頭

ピアノへの憧れから生まれた
『蜜蜂と遠雷』

恩田 陸 (小説家)

卒業生インタビュー

ずっと生き続ける
音楽をとどけたい

池田綾子 (シンガーソングライター)



ピアノへの 憧れから生まれた 『蜜蜂と遠雷』

恩田 陸 (小説家)



国際ピアノコンクールを舞台に、4人の若きピアニストたちが競い合い切琢磨する姿を描いた青春群像小説『蜜蜂と遠雷』。“音楽が聴こえてくる”とまで言われた本作は、2016年に刊行されるやいなや大評判をよび、著者の恩田陸さんは直木賞と本屋大賞をダブル受賞という史上初の快挙を成し遂げました。その恩田さんが、この小説の創作にまつわる裏話やご自身の音楽への想いなど、興味深い一文を寄せてくださいました。なお、10月4日より映画版の『蜜蜂と遠雷』が公開されます。劇中、物語の中心であるコンクール会場として、本学入間キャンパスのバッハザールが登

場しますが、撮影はバッハザール内のあらゆる場所で行われ、映画のほぼ全編にわたって使用されていますので、こちらもお楽しみに。

音楽を始めたころ

武蔵野音楽大学のホール、バッハザールに映画『蜜蜂と遠雷』の撮影を見に行くため一人で向かっていた時、ずっと昔、初めてピアノを習い始めた頃のことを思い出した。

当時、四歳の私は松本に住んでい

て、鈴木メソードの本拠地である松本音楽院にレッスンに通っていた。同じ教室の東誠三さんが天才少年として話題になっていたのを覚えている。ぽっかり開けたところにある、大きな箱みtainな立派な白い建物。松本の空の広い感じと、バッハザールの周りの景色とがなんとなく似ていたせいかもしれない。

最初についたカタオカハルコ先生はとても厳しく怖かったのですが、他の先生は苗字しか覚えていないのに（引越が多かったため、五人の先生に



▲ 映画の撮影時、バッハザールの壁面には「芳ヶ江国際ピアノコンクール」の看板が取り付けられた

©2019 映画『蜜蜂と遠雷』製作委員会

恩田 陸 Riku Onda

1964年宮城県生まれ。1992年『六番目の小夜子』でデビュー。2005年『夜のピクニック』で吉川英治文学新人賞と本屋大賞、2006年『ユー・ジニア』で日本推理作家協会賞、2007年『中庭の出来事』で山本周五郎賞、2017年『蜜蜂と遠雷』で直木三十五賞と本屋大賞を受賞。主な作品に『球形の季節』『三月は深き紅の淵を』『光の帝国』『ライオンハート』がある。

©2019 映画「蜜蜂と遠雷」製作委員会

習った)この先生だけはフルネームで覚えている。おかげで基礎を叩きこまれたわけだが、その後も先生は皆怖くて、唯一「ピアノを弾くのは楽しい」と思わせてくれたのは、秋田で一年間だけ習ったキクチ先生だった。このキクチ先生が、「僕のいちばん好きなピアニスト」と言っていて私が引越す時にリパッティのレコードを下さった。これがリパッティとの出会いで、今も愛聴しているのも、キクチ先生には感謝している。

私とピアノ

自分が天才ではないことには早々に気付いていたが、それでもピアノは好きだった。先生についていたのは中学二年までで、最後に習っていた曲はベートーヴェンの「悲愴」。中学三年の春に引越して以降は、高校時代まで自己流で弾いていた。

中学時代は合唱部に入っていてアルトパートを歌っていたが、伴奏者がいない時は大体私が伴奏していた。初見演奏に強かったのも、重宝されていたのである。

小学校六年の時、リヒテルのレコード「ソフィア・リサイタル」の「展覧会の絵」を聴いて、あまりの衝撃に、弾けもしないのに楽譜を買ってもらった。むろん、ただでさえ手の小さい私にいちばん弾きたかった「キエフの大門」が弾けるはずもなく(「プロムナード」ですら怪しかった)、挫折したままであるが。

高校時代は学園祭でヘヴィ・メタルバンドのキーボードを弾いたり、吹奏楽部の定期演奏会のエキストラでハープのパートをピアノで弾いたり。

大学時代は上京してアパート暮らしになったので、ピアノとはお別れ。ビッグバンド・ジャズサークルに入り、以来、ジャズばかり聴いていたが、社会人になり、三十代になって、

またクラシックを聴くようになった。学生時代、同じサークルにいた男の子が、「大学に入るまでにさんざんジャズを聴いてきたので、聴くものがなくなって今はクラシックを聴いている」と言っていた意味が今ならばよく分かる。ジャズを聴く耳になった後でクラシックを聴くと、その凄さと面白さがより深く味わえるようになった気がする。ジャズでもクラシックでも、今でもやはりピアノを聴くのがいちばん好きだ。

ピアノコンクールを小説に

このようにピアノとのつきあいは長かったのだが、まさか自分がピアノコンクールの小説を書くことになるとは、小説家になった時点でも夢にも思わなかった。

そもそものきっかけは、学生時代に部室が隣にあったサークル、モダン・ジャズ研究会をモデルにした小説を書いたことだった。その小説で、演奏シーンを書いてみたら、とても面白かったのである。その経験が頭に残っていて、それなら、自分でも長



▲映画「蜜蜂と遠雷」ポスタービジュアル
4人の運命が動き出す場所として、静寂の中にも圧倒的な存在感を放っているパッハザール

いこと弾いていたピアノの小説を書いたら面白いかも、と直感したのだ。「じゃあ、ピアノの小説って、どんな設定の小説だろう?」と考えた時に、はじめと終わりがはっきりしているピアノ・コンクールなんかどうだろう、と思いついた。

それと前後して、たまたま手にした新聞か雑誌で、浜松国際ピアノコンクールに最初書類選考で落ちたコ



▲森崎ウィンさん演じるマサルの熱演に、盛大な拍手が沸き起こる
本学学生および本学附属高等学校生徒も、希望者のみ観客役のエキストラに参加した

ンテスタント(ラファウ・ブレハッチ)がオーディションに合格して参加し、するすると勝ち上がり最高位を獲ったのち、ショパン・コンクールで優勝した、というエピソードを読んだのである。ふむ、これは面白いな、小説っぽいエピソードだな、と思ったのが直接のきっかけだった。小説を連載する雑誌の担当編集者がたいへん音楽に詳しい人だったので、「協力してもらえるな」と思ったのも大きい。

苦労したプログラム作り

そんなわけで小説のモデルにするために浜松国際ピアノコンクールに通い始めたが、いちばん苦労したのは、コンクールで登場人物が弾くプログラム作りだった。

幾らピアノを長いこと聴いてきたとはいえ、コンクールのプログラムという視点で曲を見たことなどなく、果たしてきちんとしたプログラムが作れるのかとても不安でたまらなかった。とにかく浜松国際ピアノコンクールのプログラムを参考に、まずは課題曲となる曲の音源を集める

ところからスタートした。さすがに楽譜は全部は集められなかったが、平均律クラヴィーア曲集や、描写に苦労しそうな曲(リストのロ短調ソナタなど)や、コンチェルトの楽譜は購入した。

いちばん最初に決まっていた曲はたったのふたつのみ。

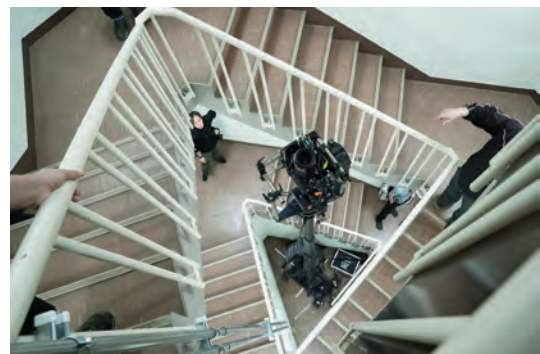
異能の天才少年、風間塵が一次審査で弾くバッハの平均律クラヴィーア第一巻第一番と、モーツァルトのピアノ・ソナタ第十二番へ長調、K.332第一楽章である。

モーツァルトのK.332は、私が子供の頃に初めて弾いた時、文字通り雷に打たれたような衝撃を受けた曲だった。

その時のことは今でもよく覚えている。キッチンで私の弾いているピアノを聴いていた母が飛んできて、「いい曲ねえ」「だよねー」と二人で感激しあった光景が目に残っているのだ。

なので、これだけは絶対にこの天才少年に弾かせようと決めていた。しかし、他の曲は全くの白紙。平均律クラヴィーア曲集だけでも、この

©2019 映画「蜜蜂と遠雷」製作委員会



▲ バッハザール内の螺旋階段も撮影場所に
繊細かつ斬新に撮影された映画の映像は、すべてが情緒的で美しい

たくさんある曲の中からどれを選ぶか、ほとんど途方に暮れていた。ひたすら聴き比べて熟慮の末に選んだつもりではあるが、実は今でもこの選択が彼らに合っていたのか、他に合った曲があったのではないかと不安である。

プログラムを作っては、その順番通り音源を聴いてゆくという地道な繰り返し。こんなにも音楽を必死に、熱心に、いろいろなことを考えながら聴いたことはなかった。この労力を子供の頃に遣っていたら、もうちょっとピアノが上手くなっていたかも、と思ったほどである。

あの曲を弾かせたい

小説の連載と並行してプログラム作りも試行錯誤し続け、実際の演奏シーンを書く間際まで替え続けた。

たとえば練習曲。資料として聴き始めた頃はポリーニの名盤のあるショパンや派手なリストの練習曲のほうに親しみがあったので、登場人物にもこちらから選んで弾かせようと思っていた。ところが、ラフマニノフやバルトークなど、他の練習曲を聴き込んでいくと、こちらのほうが自分としては好みだと気付く。そうすると、そっちを弾かせたくなるもので、かなり入れ替えた。

浜松国際ピアノコンクールで実際



▲ 石川慶監督(右)、ピオトル・ニエミイスキ撮影監督(左)
1シーンごとに丁寧にモニターをチェックし、綿密な打ち合わせをしながら撮影が進められる

に聴いて、この曲をマサルに弾かせようと思ったのはバルトークのピアノ・ソナタSz.80だ。弾いていたのは忘れもしない、今や広く活躍されている加藤大樹さんである。

コンクールに四回も通うと、見覚えのあるコンテストが他のコンクールで優勝していたり、プロとして活躍していたりと、ああ、あの人もこの人も出ていたな、と思うことが増えて感慨深い。これもコンクールならではの楽しみ方である。

コンクールは演奏時間が厳密に決められているので、時間も計らなければならない。音源の時間を足し算して規定内に収めるのには苦労した。本当はシューベルトかシューマンのソナタを入れたかったのだが、この二人のソナタ、どれもこれも長い曲ばかりなのである。プログラムの組み立て上、残念ながら入れられなかった。スクリャービンも面白い作曲家なので入れたかったが、彼の面白さを発見したのは連載を始めてかなり経ってからだったので、これまた入れそこなってしまった。

本選で四人の登場人物が弾くピアノ・コンチェルトは、三人は比較的早く決まっていた。マサル・カルロス・レヴィ・アナトールがプロコフィエフの三番、栄伝亜夜がプロコフィエフの二番、高島明石がショパンの一番。

実は、栄伝亜夜が、かつてコンサートでドタキャンした時の曲がプロコフィエフの二番だったというのをずっと忘れていて、後から「おお、そうか、これでリベンジになったんだ」と気付いた。ずいぶん間抜けな話である。

迷ったのは、風間塵に何を弾かせるかである。バルトークがいいな、とは思っていたが、彼にもプロコフィエフの三番をマサルとは全く違う解釈で弾かせる、という案も捨てがたかったのだ。ずいぶん長いあい



▲出演の4人。左上から時計回りに栄伝亜夜役の松岡茉優さん、高島明石役の松坂桃李さん、風間塵役の鈴鹿央士さん、マサル役の森崎ウィンさん
バッハザールのステージ上で繰り広げられる4人の白熱した演奏シーンは必見

だ迷っていたが、あるCDを聴いてバルトークの三番に決めた。

2015年に出た、キース・ジャレットの古希の記念に日本で企画されたアルバムである。ジャズとクラシックの二枚組。そのクラシックのほうに収録されていたバルトークの三番の演奏がとても素晴らしく私好みの演奏だったので、「風間塵が演奏するのはこれだ!」と思ったのである。

バッハザールで感じたこと

演奏シーンを書くのはどれも非常に苦労したが、小説の中で天才になりきってピアノを弾くのは楽しかった。かつてピアノを弾いていた時、まれに訪れる僥倖——あれはある種の「ゾーン」に入っていたのだろう——もはや自分でピアノを弾いている感じではなく、ピアノを弾いている自分をちょっと斜め上から俯瞰している状態——後ろで誰かが微笑みながら見守ってくれているような感覚——を思い出したりした。

書いているあいだは苦痛ばかりの小説だったが、完成したあとでは、小説の中でピアニストとして生きられ

たような気がして、なかなか得がたい体験ができた。

しかも、絶対に無理だと思っていた映画化が実現するなんて、もうほとんど撮影が終了しているこの時点でも信じられなかった。

バッハザールで、観客役の大勢のエキストラの皆さんと一緒に舞台の上の演奏シーンを眺めながら、この光景を子供の頃の自分に見せたいとしみじみと思った。ピアノに憧れていた自分、田んぼの畦道の中をレッスンに通った自分、モーツァルトに感激した自分、リヒテルに衝撃を受けた自分に。そして、改めて、今も私はピアノに憧れ続けているのだなあ実感したのだった。



▲単行本『蜜蜂と遠雷』(幻冬舎刊)の表紙

本学が所蔵する 大作曲家たちの文化遺産

S棟教室前グラフィック

(文：福井直昭 副学長)

江古田キャンパス内は、画一的な空間となりがちな廊下でさえも、各ゾーンの機能や形態に応じ、さまざまな印象を持つ共用空間としてデザインされています。その中でも、今回はS棟に設置されている、本学所蔵の大作曲家たちによる自筆譜・書簡等のグラフィックについて、福井直昭副学長が紹介します。

65年前のケンプ氏による本学へのメッセージと ベートーヴェン自筆の《月光》スケッチ稿

S棟西側3、4、5階の教室前廊下には、本学所蔵の大作曲家・演奏家の自筆譜・書簡等が各々上下2つずつグラフィックデザインされた小スペースがあります。まず3階は、「楽聖」ベートーヴェンに関するものです。上部は、ドイツのピアニスト、オルガニストの巨匠ウィルヘルム・ケンプ氏が、1954年11月26日に本学へ贈ってくださったメッセージです。ベートーヴェンのピアノ協奏曲第5番《皇帝》の第3楽章冒頭のテーマとともに「その上昇している王のテーマのように、武蔵野が発展していくことを願っている」と書かれています。初来日(武蔵野でも特別演奏会を行った)以来、18年ぶり2度目の来日を果たしたケンプ氏は、11月11日と24日に東京交響楽団と《皇帝》を協演しています。おそらく氏には2日前の演奏の余韻が残っており、このような

メッセージにつながったのだと想像できます。ケンプ氏は、この7年後の1961年10月7日、ベートーヴェンホールのパイプオルガン披露式で、記念演奏を行ってくださいました。

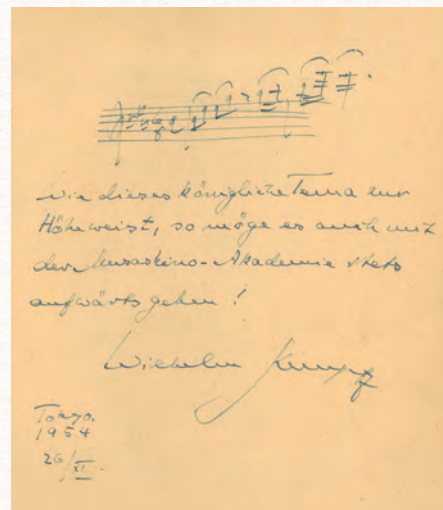
ベートーヴェンの創作過程における大きな特徴に、



▲ベートーヴェンホール



▲本学園創立者・福井直秋(左)とウィルヘルム・ケンプ氏(1961年10月)



▶ケンプ氏から本学に贈られた直筆メッセージ(1954年11月26日)

入念な予備的作業をスケッチ段階において行ったことがあげられます。3階グラフィックの下部は、ベートーヴェン自身によって書き留められたピアノ・ソナタ第14番《月光》スケッチ稿です。この作品の現存しているスケッチ稿は5点のみで、そのすべてが第3楽章に関係するものですが、元々それら

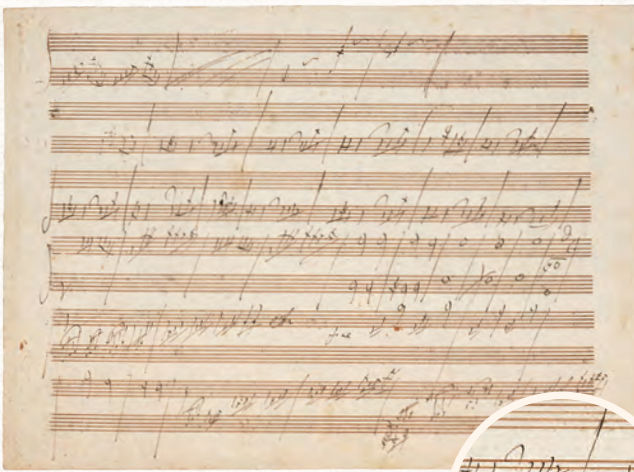


▲ベートーヴェン像

は、ベートーヴェンがおそらく1801年の春から秋にかけて使い、彼の死後1枚ずつばらばらにされ、非常に不完全な形で伝承されたスケッチ帳の一部でした。長年に渡り友好関係を築いてきたボンのベートーヴェン・ハウスと本学は、ス



▲S棟3階教室前グラフィック



▲ベートーヴェン《月光》自筆スケッチ稿

ケッチ稿を各1点ずつ所蔵しており、さらにボンのコレクションには自筆浄書譜もあるため、このソナタのスケッチ稿、自筆譜、オリジナル楽譜のファクシミリ版が、両者により2003年に共同出版されました。本学所蔵の自筆スケッチは、かつてはシューマンが所有していたもので、おそらく1838年から1839年にかけてのウィーン滞在中に、これを手に入れたと言われています。

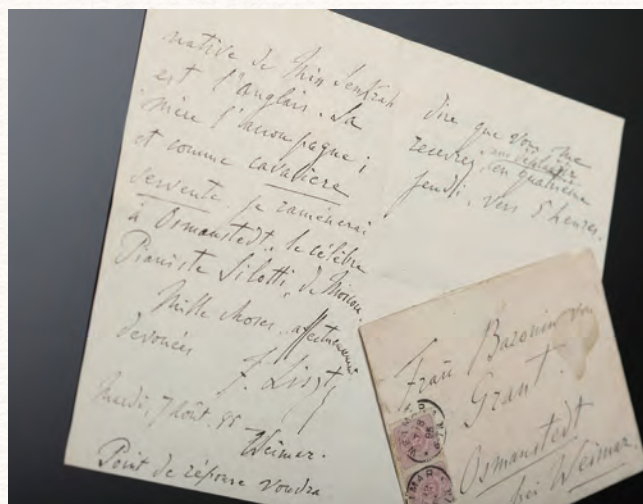
リストの生活・性格が窺い知れる自筆書簡とベルリオーズに贈ったショパンの自筆譜



▲S棟4階教室前グラフィック

4階は、ロマン派を代表する2人の作曲家の自筆譜・書簡がデザインされています。上部は「ピアノの魔術師」リストによって書き綴られた書簡で、亡くなるほぼ1年前に、ワイマール近郊のオスマンシュテットに住んでいたグラン男爵夫人に宛てたものです。消印によれば、1885年8

月7日にワイマールから投函し、翌8日にオスマンシュテットに着いたことが分かります。カナダのヴァイオリニスト、ゼンクラー嬢を貴婦人に紹介しようという主旨であり、リストの最後の高弟の一人で有名なピアニストのジロティーを連れて行くことも知らせています。「女性にかしずく騎士のように、母親が彼女に同行します」という箇所には、リスト独特の皮肉を込めた言い方が窺えます。手紙本文はフランス語で、封筒の宛名はドイツ語で書かれています。晩年のリストは、ブ



▲リストがグラン男爵夫人に送った手紙(1885年8月7日)



▲リストプラザ

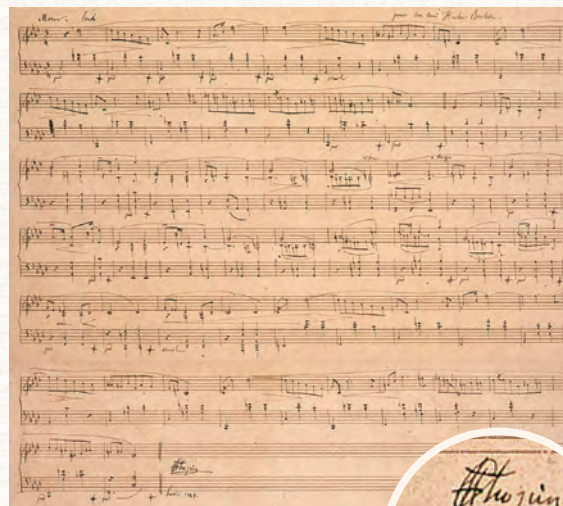
ダペスト＝ワイマール＝ローマの各都市を巡る、いわゆる「三分割の生活」でした。そんな移動生活を営む彼の下には、次世代の音楽家たちが、弟子入りを志願したり、作曲のアドバイスや紹介状等を得ようと、ひっきりなしに訪れていました。この書簡で述べられているゼンクラー嬢もそのひとりです。

4階下部には、1968年より本学が所蔵している「ピアノの詩人」ショパンの《マズルカ》Op.63-2の自筆譜がデザインされています。ショパンは少年期から晩年に至るまで、生涯で58曲にも及ぶマズルカを書き続けましたが、死の3年前(1846年)に作曲された作品63の3曲は、ショパンの存命中に出版された最



▲ショパン像

後のマズルカ集で、ロール・チョスノフスカ夫人に献呈されました。楽譜右上には『pour son ami Hector Berlioz. (友人エクトル・ベルリオーズのために)』と書かれており、さらに、終止線横には『F. Chopin, Paris, 1847』のサインが記載されています。世界的音楽学者アラン・ウォーカー氏によれば、ショパンはしばしば自身の短い作品にサインを入れて親しい友人にプレゼントしていたそうで、ウォーカー氏は本学所蔵のこの自筆譜のことも「おそらくショパンがベルリオーズに贈ったその類のプレゼントである可能性が高い」



▲ショパン《マズルカ》Op.63-2の自筆譜

という見解を寄せてくださいました。この自筆譜は、元々ベルリオーズの後継者が所有していたと言われています。

日本に現存するブラームス唯一の自筆譜と バッハの整然とした筆跡による傑作の自筆譜



▲S棟5階教室前グラフィック



▲ブラームス《雨の歌》WoO23の自筆譜



譜にも見られるように、ト音記号とヘ音記号をつなげて書くので、一見すると譜表と譜表をつなぐブレスのように見えます。

5階下部は、J.S. バッハの《パルティータ第3番 ホ長調 BWV1006a》の自筆譜です。これは、ヴァイオリン独奏の楽曲として古今の名作の一つに数えられる《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ BWV1001-1006》をバッハ自身がリュートのため（ハープという説もある）に編曲した作品で、バッハならではの達筆で記されています。非常に鮮やかなインクで書かれたこの自筆譜には、しっか

5階のグラフィックは、3階のベートーヴェンと共に「ドイツ3大B」と称される2人の作曲家に関するものです。上部はブラームスの歌曲《雨の歌》WoO23の自筆譜で、これは日本に現存するブラームスの唯一の自筆譜です。この作品は1872年夏以前に、この歌詞の作者であるドイツの詩人クラウス・グロートに贈られました。グラフィック右下の書き込みはブラームスではなくグロートによるもので、この詩をブラームス、シューマンとともに《F.A.E. ソナタ》を合作したドイツの作曲家・指揮者のアルベルト・ディートリヒのために作ったということが記述されています。作曲家ごとに自筆譜の書き方は大きく異なるのですが、ブラームスの場合は、何と言っても音部記号が独特です。この自筆

譜にも見られるように、ト音記号とヘ音記号をつなげて書くので、一見すると譜表と譜表をつなぐブレスのように見えます。

非常に鮮やかなインクで書かれたこの自筆譜には、しっか



▲ブラームスホール



▲J.S. バッハ像

りと示された音符の位置や形状に加え、音部記号や調号、8分音符や16分音符の桁などの部分にバッハの個性がはっきりと現れています。驚くほどに整然とした筆跡は、高度な対位法を駆使しながらも、全体の調和を見失わないバッハの音楽そのものを象徴しているようです。

* * * * *

今回紹介した、本学所蔵の6つの自筆譜・書簡・メッセージには、実は共通点があります。それは、どれも本学施設の名称の由来となった作曲家に関するものだということです（ベートーヴェンホール、ブラームスホール、リストプラザ、ショパンプロムナード、バッハザール）。直筆譜は、大作曲家たちが私たちに遺した音楽の大いなる遺産であり、また眺めているだけでも、得も言われぬ美しさを感じます。そのしなやかで躍動感あふれる筆致は、硬直した印刷譜面を美的にはるかに凌いでおり、音楽的な価値のみならず、アートの観点からも「文化遺産」であると言えます。また自筆書簡は、当時の音楽家たちの生活、風習を知ることができる貴重な資料です。学生や教職員、またご覧になったすべての皆様も、それぞれの大作曲家の自筆から立ち上る「何か」を感じ取ってもらえればと思います。



▲J.S. バッハ《パルティータ第3番 ホ長調 BWV1006a》の自筆譜



卒業生インタビュー

ずっと生き続ける音楽をとどけたい

● 池田綾子 ●

(シンガーソングライター)

心に染み入る透き通った歌声が魅力のシンガーソングライター、池田綾子さん。武蔵野を卒業後、プロとしての活動を始め、これまでに数多くのアルバム、シングルを発表する一方、様々なアーティストやTV、CM等に楽曲を提供してきました。クラシックからポップスへの転身、



池田綾子 Ayako Ikeda

東京都出身。武蔵野音楽大学音楽学部声楽科卒業。富田千種氏、田口宗明氏に師事。2002年から音楽活動を開始。日本語を大切にした歌詞と旋律、クラシックの発声を基調とした独自の歌声を持つシンガーソングライター。今までに数多くのTV、CM、映画、アーティストへの楽曲提供も行い、世界遺産屋久島の森の中でキャンドルの光で行う幻想的な音楽祭「やくしま森祭り」を立ち上げ、14年目を迎える。今までに7枚のアルバム10枚のシングルを発表。NHK BSプレミアム「にっぽん縦断こころ旅」、NHKみんなのうた「数え歌」「うたの歌」「ひらら恋胡蝶」「夢の途中で」。小学校の教科書に合唱曲掲載。フジテレビドラマ「いつかこの恋を思い出してきっと泣いてしまう」の主題歌「明日への手紙」(歌:手嶌葵)を楽曲提供。同曲が2016年国際ドラマフェスティバルin TOKYO東京ドラマアワードにて主題歌賞を受賞。

曲づくりの秘密などについて伺いました(2019年8月26日取材)。

合唱団で知った歌う喜び

—— 音楽との出会いと武蔵野進学を決めるまでをお聞かせください。

池田 姉の影響から4歳でピアノを始め、小学校でも姉と同じ合唱団に参加しました。歌うことがどんどん楽しくなり、埼玉県に移転後も岩槻市の少年少女合唱団に所属して中学3年まで続けました。高校は普通校でしたが、どうしても音楽の道に進みたくて音大受験を決意。武蔵野に決めたのは、相談に乗っていただいた音楽の先生、その先生に紹介を受け師事した富田千種先生、お二人が武蔵野出身だったからです。

今も思い出すのですが、入間キャン

パスでの最初の合唱の授業の時のことです。大きな合唱教室で、みんなが一斉にAの音を出したんですね。それが一本の線のようにまとまり、まるで巨大なひとりの人が出している声のように聴こえたんです。なんて美しいんだろうって、声の力に感動しました。

—— 武蔵野時代にはドイツ歌曲を専攻し、ウィーンでも学ばれたそうですね。

池田 夏休みに2週間ほどウィーンに滞在し、ウィーン音楽大学の先生に指導を受けました。「その歌が生まれた場所で歌ってみれば、なぜそうした発声になったのか、そうしたメロディになったのか、きっと分かるよ」と師事していた田口宗明先生がおっしゃったのですが、その通りでした。カラッと乾いた気候、石造り



▲ 江古田キャンパスの図書館にて



▲キャンドルライトの幻想的な雰囲気の中行われる『やくしま森祭り』

の建物、こうした環境だからこそ、あの発声法が生まれたんだと実感しました。

苦勞して書き上げた1曲

——卒業後、シンガーソングライターとしてデビューするまでの経緯をお聞かせください。

池田 4年生になり、将来について田口先生から大学院や海外留学を勧められた頃、母親が病気になりました。今ではとても元気ですが、当時は家族一同かなり深刻に捉えていました。

クラシックの道を追求するには経済的に厳しい、でも音楽は諦めきれない。だとしたら、たとえまだ未熟で足りないものがあっても、今の自分の声と感性で歩いてゆける音楽のジャンルは何だろう？ その答えが、自分の言葉とメロディで自分の想いを表現するポップスのシンガーソングライターの道でした。

——すんなりデビューすることはできましたか？

池田 いえいえ。シンガーソングライターを志した時点では、ただの1曲も書いたことがありませんでした。

無謀ですよ(笑)。当然すごく苦勞しました。卒業式までに納得のいく曲が書けなかったら潔く諦めようと決意し、とにかく頑張りました。何とか書き上げ、卒業式の当日、袴姿のまま芸能事務所に譜面を送付。結果、事務所に入ることができ、2002年にデビューできました。このとき作った曲は、ファースト・アルバムに収録されました。

屋久島との不思議な縁

——曲をつくる上で大切にしていることは？

池田 常に心を大切にしています。言葉の持つ力、それは心につながっています。心があり、その心を伝える言葉があり、言葉では表現できない部分をメロディで補って曲にしていく。この順番は変えられません。綺麗な作品を書きたいとか、自分の力以上のものを書きたいとか、正直そんな欲もあります。でも、それでは順番を遡ることになってしまう。つまり、心が最後になってしまう。形式的だったり、頭で無理やり考えるのではなく、常に今の自分の心から出発することを心がけています。

——様々な活動をされている池田さんですが、発起人でもある『やくしま森祭り』についてお聞かせください。

池田 屋久島で働く恩人に曲を書いて以来、不思議に島と縁ができ、地元の人から「島に呼ばれたんだね」と言われました。そんなある時、屋久島の山に登り雄大な景色を目にした瞬間、不意に“命の輪”というものを感じたんです。生きるも死ぬも一つの大きな円になっていて、大きな命になっている、そう感じて涙が止まりませんでした。あとで知ったのですが、この同じ日、友人の尺八奏者が別の山で命を落としていたのです。私が感動した景色は、友人が最後に見たものと一緒だったのかもしれませんが、その後、私と島の縁はさらに深まり、島のために何ができるだろうかと考えていた折、島の人々には生の音楽に触れる機会がない、屋久島ならではの音楽祭ができたなら…そんな話を聞きました。その瞬間、「ああ、私が呼ばれたのは、このためだったんだ」と。2006年の秋、満月の日、満天の星空のもと、極力ライトを使わず何千本ものキャンドルで照らすアコースティックの音楽祭が生まれま



した。もちろん今年も10月5日に開催します。

武蔵野で得た財産

—— 新キャンパスの印象はいかがですか？

池田 最初見たときはびっくりしました。美し過ぎて(笑)。正直言うと私にとっては旧校舎にすごく愛着があって、昔のままの方が風情があっていいのに、と思っていたんです。でも実際に新キャンパスを目の当たりにすると、こんな大学で勉強のできる学生さんは幸せだなって思いました。アート感覚にあふれていて、余白があると言うのでしょうか、創造する場所がたくさんあるように私

の目には映りました。色々な感性を吸収して、もまれながら、夢の道を歩いていく学生の姿が想像できて胸が熱くなりました。

—— 武蔵野時代を振り返って思い出すことは何でしょう？

池田 武蔵野の在学中に本物の音楽とたくさん触れあえることができました。それが今の私のかげがえのない大きな財産です。そして、やはり恩師の田口先生ですね。先生は常に学生の想いや考えを尊重してくださり、悩んだり、不安に陥ったりした時には力になってくださいました。最初のCDが出たときには自分のことのように喜んでくださり、その翌年には先生の故郷の天草市でジョイントコンサートを組んでくださって、同じステージに立て光栄でした。今でも先生とは親交があります。

—— 武蔵野の後輩たちに贈るメッセージをお願いします。

池田 出合いを大事にして欲しいですね。自分だけで考えていると、知らずに未来へ壁をつくって世界が狭くなってしまいがちです。一生懸命になればな



るほど、そういうことがあるのではないのでしょうか。そんな時は、恩師でも、友人でも、自分から積極的に出向いて触れ合う。あるいは旅に出る、コンサートや美術館に出かけるなど、有形無形を問わず自分に訪れる出会いの機会を感じるアンテナを立てておくが必要だと思います。

—— 最後にこれからの池田さんの夢をお聞かせください。

池田 スケールの大きな話になりますが、人間の寿命を超えられるような音楽、私が旅立った後もずっと残るような音楽、残るというより、それを聴いた人の中で生き続ける音楽をつくりたいですね。『やくしま森祭り』も後世にうまくバトンをつなぎ、100年続くお祭りとなることを夢見ています。



▲ 恩師の田口宗明先生と

音楽の万華鏡 47

クラシック音楽は 終わり方が大事

いみじくも、アメリカの音楽学者スーザン・マクレアリは、「諸芸術の中でクラシック音楽ほど、終結部が絶対的な条件となる分野はそうはあるまい」と指摘した(『フェミニン・エンディング』、新水社、女性と音楽研究フォーラム訳)。確かに、モーツァルトの《ジュピター》交響曲、ワーグナーの楽劇《ニュルンベルクのマイスタージンガー》、ラヴェルの《ボレロ》といった作品が、静かにディミヌエンドで終わっていたら、作品の印象はまったく

異なってくるだろう。また反対に、リストの《ピアノ・ソナタ 短調》、ドビュッシーの《牧神の午後への前奏曲》、マーラーの《交響曲第9番》といった作品が、明るく力強く終わったならば、やはり作品の印象はまったく異なるにちがいない。いうまでもなく、明るく力強い終わり方にはポジティブな意味が生じ、弱々しく暗い終わり方にはネガティブな意味が生じる。そして、力強く終わる曲には力強く終わる理由があり、静かに終わる曲には静かに終わる理由がある。

たとえば、来年生誕250年を迎えるベートーヴェンの作品から、《第9》交響曲(1824年初演)を取り上げてみよう。《第9》の終楽章には、シラーの「歓喜に寄す」による合唱が加わり、最後は華やかに終わる。ここにはポジティブな意味しか

ない。最後に歌われることばは「神々の火花 Götterfunken」で、ご丁寧に2回繰り返される。そしてこの歌のあと、シンバルや大太鼓などが加わったオーケストラによるどんちゃん騒ぎが続く。

ここでいう「神」が複数である以上、キリスト教的な唯一絶対神ではなく、ギリシャ/ローマの複数の神々を指している。実際、《第9》といえば「すべての人々が兄弟となる」というメッセージ性のイメージが強い。だがこの終わり方からすれば、ベートーヴェンの主眼は、ギリシャ/ローマの神々が火花を飛び散らせながら狂喜乱舞する、という「歓喜」のイメージにある。この終わり方が異常であることを見逃してはならない。

稲田隆之(本学音楽学教授)

各会場をわかせた華麗なる武蔵野サウンド

❖ ウィンドアンサンブル演奏会

武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブル演奏会が、指揮者に2014年以來4度目の着任となるジェームズ・M.ランブレクト教授を迎えて、東京オペラシティ コンサートホール(7月12日)、石川県こまつ芸術劇場うらら 大ホール(7月15日)において開催されました。

プログラムは、J.ウィリアムズ「フォー・ザ・プレジデント・タウン」で華やかに始まり、F.ティケリ「レスト」、M.ガンドルフィ「栄華と瞑想〜ルネサンスの主題による」、F.ティケリ「ブルー・シェイズ」、A.リード「アルメニアン

ダンス Part 2」の5曲に加え、全日本吹奏楽コンクールの課題曲を盛り込んだ色彩豊かな構成でした。学生たちは、ランブレクト教授の指導のもと丁寧に作品を作り上げ、柔らかく深みのあるハーモニー、金管楽器の迫力あるサウンドやパーカッションの軽快なリズムで聴衆を魅了し、どの会場でも盛大な拍手をいただきました。

❖ 管弦楽団演奏会

武蔵野音楽大学管弦楽団演奏会が、岡山シンフォニーホール大ホール(9月14日)、東京芸術劇場コンサートホール(9月20日)にて開催されました。今回は、国内外で広く活躍されている末廣誠氏を指揮者に迎え、チャイコフスキー「ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調 Op.23」そして、プロコフィエフ「交響曲 第5番 変ロ長調 Op.100」を演奏しました。

ピアノ協奏曲では、学生オーディションで選ばれた高橋七海(音楽学部 ヴィルトゥオーゾコース2年、14日)、吉原麻実(大学院 ヴィルトゥオーゾ



コース1年、20日)が、日々積み重ねてきた鍛錬の成果を遺憾なく発揮し、広く知られているこの作品の世界観をオーケストラと共に見事に作り上げました。後半の「交響曲第5番」では、音楽的にも技術的にも難曲とされる作品に果敢に挑み、楽章ごとに異なる物語の背景を全力で表現し、熱のこもった力強い演奏に会場からは惜しみない拍手が送られました。

12月4日には、武蔵野音楽学園創立90周年を記念し、飯守泰次郎氏指揮による管弦楽団合唱団演奏会が東京芸術劇場で予定されており、ベートーヴェンの大曲「荘厳ミサ曲 二長調 Op.123」を採り上げます。ソリストは、すでに国内外で活躍しており、将来益々の活躍が期待されている卒業生の森谷真理(ソプラノ)、鳥谷尚子(アルト)、青地英幸(テノール)、三戸大久(バス)の四氏が務めます。巨匠と新進気鋭の若手歌手、そして本学学生による演奏にご期待ください。



著名演奏家の生の音にふれた極上の時間

❖ ケマル・ゲキチ ピアノ・リサイタル

去る6月27日、ケマル・ゲキチ ピアノ・リサイタルが、本学ベートーヴェンホールで開催されました。毎年客員教授として本学を訪れ、リサイタルを開催しているゲキチ氏は、現在もなお、カリスマ性を持つピアニストとして、世界中の熱狂的な聴衆の支持を受け続けています。

今回のリサイタルでは、冒頭で当初のプログラムには無かったリストのコンソレーション第3番を瞑想的

に演奏し、続いてショパンのソナタ第2番 変ロ短調 Op.35〈葬送〉、リストの〈ダンテを読んで〉-ソナタ風幻想曲-で見事な音楽性とテクニックを披露。後半にはバッハの平均律クラヴィーア曲集第一巻より7曲を取り上げ、オルガン的な音色の変化を交えて精妙かつ豊かな楽想が展開されました。最後に聴く機会の少ないカプースチンのピアノソナタ第1番 Op.39〈ソナタ・ファンタジー〉が演奏され、温かい響きとジャズ風のエキ



サイティングなリズムに、聴衆は酔いしました。アンコールは再びリストのコンソレーションで締めくくられ、氏の奏でる美しい音楽に、満席の会場からは拍手が鳴り止みませんでした。

✿ ジョルジ・シャラモン

クラリネット特別公開レッスン

7月9日、ハンガリー国立フィルハーモニー管弦楽団クラリネット兼バスクラリネット奏者である、ジョルジ・シャラモン氏による「クラリネット特別公開レッスン」が、本学ウィンドアンサンブルホールで開催

されました。

レッスンに先立ち行われたミニコンサートでは、B♭管・A管クラリネットとバスクラリネットそれぞれの独奏曲を披露し、シャラモン氏ならではの美しく豊かな音色と卓越したテクニックで聴衆を魅了しました。

公開レッスンでは、バスクラリネッ



トのオーケストラスタディや演奏技術が分かりやすくレクチャーされ、聴講者は熱心に耳を傾けていました。

附属音楽教室 夏期ミュージックキャンプ2019

8月4日から2泊3日の日程で、附属音楽教室の「ミュージックキャンプ」が、本学軽井沢高原研修センターにおいて開催されました。普段のレッスンや授業では取り組むことの少ない室内楽のほか、合奏や合唱などを江古田・入間・多摩三音楽教室が合同で行います。

このミュージックキャンプでは、音楽だけでなく参加者全員がコンサートやレクリエーションなどの係りを担当し、みんなで協力しながら準備を進めていきます。小学校3年生から高校生までの生徒が交流することで、ふだん関わりのない先輩・後輩のつながりができ、各々が成長する良い機



会となっています。

短い準備期間ではありましたが、各自が熱心に練習に取り組み、コンサートでは練習の成果を存分に発揮していました。最終日は、アスレチックや『カブトムシドーム』見学などで、楽しい夏の思い出を作ることができました。音楽を通してかけがえのない友と出会う、夏の有意義な附属音楽教室のイベントとなりました。



令和元年度 同窓会全国総会開催

8月7日、学園創立90周年記念武蔵野音楽大学同窓会全国総会が母校プラムスホールにて開催され、連日の酷暑の中、母校のために222名もの同窓生が集いました。

総会に引き続き演奏会が開かれ、ヴィルトゥオオズコースに在学の学生による演奏を楽しみました。その後、HOTEL 椿山荘 TOKYOに場所を移して催された懇親会では、懐かしい友や様々な世代の同窓生と交流を深めるなど、和やかなひとときを過ごしました。



外国人教授紹介

(2019年度後期)



クリスティアン＝フリードリヒ・ダルマン
Christian-Friedrich Dallmann (ホルン/ドイツ)

ハンス・アイスラー音楽大学にてクルト・パルムのもとで研鑽を積んだ後、1978年にマルクノイキルヒェン国際音楽コンクールホルン部門で第1位受賞。同年ベルリン交響楽団(現ベルリン・コンツェルトハウス管弦楽団)のソロホルン奏者となり、以後22年以上首席奏者を務めた。またヘルムート・リリング音楽監督のもとシュトゥットガルト国際バッハアカデミーに招かれ、数多くのプロジェクトでソロホルンを担当。さらに古楽器による演奏活動も、ベルリン古楽アカデミーのメンバーとして行い、国内外への多くの演奏旅行とCDの録音を行った。ハンス・アイスラー音楽大学、デトモルト音楽大学を経て、現在はベルリン芸術大学教授として後進の指導にも当たり、優れたホルン奏者を多数輩出している。



テリー・オースティン
Terry Austin
(ウィンドアンサンブル指揮/アメリカ)

インディアナ大学で音楽教育を専攻、またハワイ大学で修士号、ウィスコンシン・マディソン大学で博士号を得る。現在はヴァージニア・コモンウェルス大学のバンド・ディレクターと教授を務め、同大学のシンフォニック・ウィンドアンサンブルの名声を全米に広めた。ゲスト・コンダクター、クリニシャン、審査員としても活躍するほか、音楽教育関連の著作も数多く執筆している。



武蔵野音楽学園創立90周年記念寄附金 ご寄附をいただいた方々

学校法人武蔵野音楽学園では、寄附金に対する税額控除制度の恩典が与えられたことに鑑み、教育環境整備基金、福井直秋記念奨学基金並びに演奏活動特別基金の拡充を目的とする寄附金を募集しましたところ、下記の方々よりご寄附をいただきました。ここにご芳名を掲載し、深く感謝の意を表します。

学校法人 武蔵野音楽学園

※ご芳名(五十音順)は、平成31年4月1日から令和元年6月30日までにご寄附いただいた方々です。それ以降の方々は、次号にて掲載させていただきます。また勝手ながら掲載区分は当方で決めさせていただきました。何とぞご了承ください。

※本学ウェブサイトからも、クレジットカード決済によりご寄附のお手続きができます。是非ご利用ください。

【同窓生】 石原多美様 市原光江様 岩井ゆう子様 植田礼子様 打越孝裕様 瓜生真由美様 岡 益代様 小口千恵様 寛 美代子様 勝見むつ子様 香山重子様 久邇邦昭様 向阪美智子様 佐々木登代子様 志賀訓子様 巽 薫枝様 永田伸子様 中谷 勉様 仲村美保様 中村裕子様 濱 満様 林 朋子様 廣瀬登喜子様 深谷陽子様 北條亮子様 本庄秀子様 松岡雅子様 光田明子様 宮城崇美子様 山岡博子様 山本文子様 吉崎憲治様 吉田厚子様 昭和60年入学同期会様 同窓会三重県支部様

【在学生・同ご父母】 新目忠俊様 石川弘文様 今牛孝昌様 岡部行伸様 長田和義様 金澤潤一様 川上敬芳様 木村 信治郎様 小林 健様 坂本 敦様 佐藤紀芳様 須川哲夫様 高島一昭様 高橋伸夫様 高原聖司様 田中 仁様 千代田 渉様 寺崎敬子様 中田晋也様 中村直史様 原 清一郎様 藤原啓志様 光武 晃様 森川大輔様 山内孝夫様 山崎 彰様 横手宏行様 横亭洋幸様 和田 朗様

【役員・教職員・一般・他】 阿久津三智子様 石川 篤様 上原正子様 上村英郷様 大滝雄志様 奥田 操様 岸田 譲様 小見山牧子様 小柳信道様 佐伯真弥子様 佐野悦郎様 重松 聡様 高田千絵様 耕 修二様 田口久仁子様 田代 慎之介様 中川俊宏様 野上 剛様 野村邦武様 原田知子様 日高正枝様 町田雅彦様 萬歳典子様 村上直行様 山口 道子様 山本正治様 (他に匿名を希望される方33名)

栄冠おめでとう！(コンクール入賞者等)

●第36回日本管打楽器コンクール ファゴット部門 第2位入賞

(順不同、敬称略、経歴は受賞時のもの)

金田直道(平成29年大学ファゴット専攻卒業)

●第17回東京音楽コンクール 声楽部門 第3位入賞(1位なし) 井出壮志朗(平成24年大学声楽専攻卒業、本大学院修了)

●第1回パリ国際音楽コンクール(フランス) 室内楽B部門 第1位入賞 綾目奈緒子(平成28年大学オーボエ専攻卒業)、●Southern California Marimba 2019 International Artist Competition (アメリカ) Collegiate Solo部門 第3位入賞 町田志野(平成25年大学マリンバ専攻卒業、本大学院修了)、●第34回練馬区新人演奏会出演者選考オーディション 金管楽器部門 最優秀賞受賞 岩倉宗二郎(平成30年大学トロンボーン専攻卒業)、ピアノ部門 優秀賞受賞 佐藤陽十(大学4年ピアノ専攻)、●第23回旭川市新人音楽会公開オーディション 旭川市新人音楽賞受賞 芦野 瞳(大学2年ピアノ専攻)

※上記の他多数。大学ウェブサイトをご覧ください。

2019 オープンキャンパス・学校説明会&体験レッスン

《オープンキャンパス》《学校説明会&体験レッスン》を下記の日程で開催します。ぜひご参加ください。

◎オープンキャンパス [会場: 武蔵野音楽大学 江古田キャンパス]

◎学校説明会 & 体験レッスン

開催日	主な実施内容
10月14日(月祝)	学科紹介、授業公開、レッスン公開
12月 8日(土)★	大学案内、体験レッスン、学生によるコンサート
2020年 3月29日(土)★	大学案内、体験レッスン、学生によるコンサート

開催日	開催地	会場
10月27日(土)	北海道函館市	(株)ヤマハミュージックリテイリング 函館店 函館中央センター

※附属高等学校の説明会は★印のついた開催日のみ実施します。

※事前申し込みが必要です。詳細は本学ウェブサイトをご覧ください。

お問合せ

武蔵野音楽大学 入学センター TEL.03-3992-2500 E-mail: nyugaku-c@musashino-music.ac.jp

2019 中高生のためのステップ・アップ・プログラム

初心者の方から上級者の方まで、ピアノや歌が上手になりたい！という中高生の皆さん、音楽大学という理想的な音楽環境で、一流講師陣によるレッスンに参加し、スキルアップに役立ててください。



種別	開催日	会場
ピアノ・声楽	11月3日(土祝)	江古田キャンパス

【お問合せ】 武蔵野音楽大学 入学センター TEL.03-3992-2500
E-mail: nyugaku-c@musashino-music.ac.jp

令和元年度 10月～12月 演奏会のお知らせ

ベテル・ミハリツァ ヴァイオリン公開レッスン 通訳＝後藤博亮	10月4日(金) 18:00 モーツァルトホール (江古田)	¥1,000 (全席自由)
入間市「市民コンサート」 管弦楽団演奏会 主催＝入間市立中央公民館 入場整理券・お問合せ＝入間市立中央公民館 TEL: 04-2964-2413 指揮＝北原幸男 クラリネット独奏＝成田美佳 (音楽学部ヴィルトゥオーソ学科4年) 曲目＝ベートーヴェン:《レオノーレ》序曲 第3番 Op.72b、ウェーバー:クラリネット協奏曲 第1番 ヘ短調 Op.73 ドヴォルジャーク:交響曲 第9番 ホ短調 Op.95 (新世界より)	10月12日(土) 14:00 入間市市民会館	無料 (全席自由・要入場整理券)
日本・ハンガリー外交関係開設150周年記念／武蔵野音楽学園創立90周年記念／ジュール・フィルハーモニー管弦楽団創立125周年記念 ハンガリー・ジュール・フィルハーモニー管弦楽団演奏会 10月24日(土) 18:30 ベートーヴェンホール (江古田)		¥1,500 (全席自由)
主催＝駐日ハンガリー大使館・武蔵野音楽大学 指揮＝ベルケシュ・カールマン 曲目＝バルトーク:管弦楽のための協奏曲 BB123、リスト:交響詩《レ・プレリュード》S.97、コダーイ:《ハリー・ヤーノシュ》組曲		
武蔵野音楽学園創立90周年記念 ミハエル・ラーデンプルガー特別公開講座 ーベートーヴェンのピアノ協奏曲についてー	11月6日(土) 18:30 ブラームスホール (江古田)	¥1,000 (全席自由)
通訳＝寺本まり子		
林 明慧 ピアノ・リサイタル	11月7日(日) 18:30 ブラームスホール (江古田)	¥1,000 (全席自由)
曲目＝ベートーヴェン:ピアノ・ソナタ 第26番 変ホ長調 Op.81a (告別)、シューベルト:ピアノ・ソナタ 第21番 変ロ長調 D.960 他		
ニュー・ストリーム・コンサート38 ～ヴィルトゥオーゾコース演奏会～	11月19日(火) 19:00 ヤマハホール	¥1,500 (全席自由)
出演＝佐藤和鷹 (Ob.)、杉村美咲 (Fl.)、高橋七海 (Pf.)、佐藤陽十 (Pf.)、成田美佳 (Cl.)、渡辺愛菜 (Pf.)		
室内合唱団演奏会	11月20日(水) 19:00 ベートーヴェンホール (江古田)	¥1,000 (全席自由)
指揮＝栗山文昭、片山みゆき 曲目＝寺嶋陸也:混声合唱、2台のピアノと三線のための《沖縄のスケッチ》 他		
イリヤ・イーティン ピアノ・リサイタル	11月27日(火) 18:30 ベートーヴェンホール (江古田)	¥1,000 (全席自由)
曲目＝メトネル:忘れられた調べ 第1集 Op.38、プロコフィエフ:ピアノ・ソナタ 第6番 イ長調 Op.82		
武蔵野音楽学園創立90周年記念 管弦楽団合唱団演奏会	12月4日(土) 19:00 東京芸術劇場 コンサートホール	¥1,500 (全席指定)
指揮＝飯守泰次郎 合唱指揮＝栗山文昭、片山みゆき 独唱＝森谷真理 (Sop.)、鳥谷尚子 (Alt.)、青地英幸 (Ten.)、三戸大久 (Bas.) 曲目＝ベートーヴェン:荘厳ミサ曲 ニ長調 Op.123		
ウィンドアンサンブル演奏会	12月12日(土) 18:30 東京芸術劇場 コンサートホール	¥1,500 (全席指定)
指揮＝テリー・オースティン 曲目＝ステイーヴンソン:交響曲 第2番 (ヴォイセズ) (日本初演) 他		

※上記の他、学生による演奏会等、多数開催。詳細は本学ウェブサイトをご覧ください。

※やむを得ない事情により、出演者・曲目等を変更する場合がありますので、あらかじめご了承ください。

※チケットは本学ウェブサイトでも予約ができます。

●お問合せ 武蔵野音楽大学演奏部 TEL.03-3992-1120 ●武蔵野音楽大学ウェブサイト <http://www.musashino-music.ac.jp/>

令和元年度 武蔵野音楽大学・附属高等学校 冬期講習会のお知らせ

講習会名	実施期間	申込受付期間	会場
音楽大学受験講習会	令和元年12月23日(日)～26日(水)	令和元年11月25日(日)～12月9日(日)	武蔵野音楽大学江古田キャンパス
高校受験講習会	令和元年12月24日(月)～26日(水)	令和元年11月25日(日)～12月9日(日)	

詳細は本学ウェブサイトまたは講習会要項でご確認ください。

令和2年度(2020年度)入学試験要項ならびに各種資料の請求について

各入学試験要項(附属高等学校、大学1年次、大学3年次編・転入、大学院、別科)ならびに武蔵野音楽大学や附属高等学校等、各種資料のご請求は、本学ウェブサイト内の「資料請求フォーム」をご利用いただくか、広報室までご連絡ください。

なお、受験講習会受講者でご希望の方には、講習会期間中に入学試験要項を配付します。



各種資料請求先	武蔵野音楽大学 広報室 TEL.03-3992-1125	本学ウェブサイト http://www.musashino-music.ac.jp/
---------	------------------------------	--

編集後記

幼い頃からピアノに親しんできた恩田陸さんだからこそ書けた『蜜蜂と遠雷』。この素晴らしい音楽小説が映画化され、本学のバッハ

ザールが撮影に使われました。若手俳優の演奏場面とともに、私たちにとっては馴染み深いホールがどのように画面に登場するのか、興味津々です(編)。

台湾の鼻笛

台湾 全長42cm

「笛は口で吹くもの」という認識は、世界に目を広げてみると必ずしも当てはまらないことがわかる。口ではなくあえて「鼻で吹く」鼻笛と呼ばれる楽器は、東アジア、東南アジア、オセアニア、アフリカ、中南米など意外と広範囲に分布しており、横吹き型、縦吹き型、容器型などの種類がある。

写真の楽器は、台湾南部の先住民族であるパイワン族に伝わる縦吹き型の鼻笛である。3孔の指孔がある管と、指孔がない管を2本1組にして同時に演奏する。口で吹くほどの大きな音量は出せないが、鼻息には静かな音で靈魂を呼ぶ力が宿ると考えられており、死者を送り出す葬儀で演奏されるほか、呪術的な意味合いから様々な葬祭で用いられてきた。また時には、男性が夜女性の家を来訪する際に用いるなど、鼻笛は恋愛に欠かせないアイテムでもある。

両管とも全体に精巧な彫刻が施されており、指孔のある管には、「人の顔」がいくつも描かれている。これは、かつてパイワン族に首狩りの習慣があったことを物語っている。さらに、顔の周囲には信仰の対象である百歩蛇を表した「ヘビ」の紋様がある。パイワン族にとって首狩りは、神聖視される行為として、宗教



的な行事、呪術的な場で代々受け継がれてきた習慣であった。また、彼らは装飾工芸、特に木彫に優れた技術をもつ民族としてもよく知られ、この鼻笛のほかにも、建築物や日常の道具など様々なものに精巧な彫刻が施されている。首狩りや百歩蛇は、先住民族の遺風を伝えるモチーフとして、今も大切にされている。

(武蔵野音楽大学楽器ミュージアム所蔵)

❖ 目次 ❖

ピアノへの憧れから生まれた『蜜蜂と遠雷』	1
恩田 陸	
江古田新キャンパス探訪⑩	5
S棟教室前グラフィック	
卒業生インタビュー	8
ずっと生き続ける音楽をとどけたい 池田綾子	
音楽の万華鏡	10
クラシック音楽は終わり方が大事 稲田隆之	
MUSASHINO NEWS	11
❖ 各会場をわかせた華麗なる武蔵野サウンド	
❖ 著名演奏家の生の音にふれた極上の時間	
❖ 附属音楽教室 夏期ミュージックキャンプ2019	
❖ 令和元年度 同窓会全国総会開催	
❖ 外国人教授紹介(2019年度後期)	
❖ 武蔵野音楽学園創立90周年記念寄附金 ご寄附をいただいた方々	
❖ 栄冠おめでとう! (コンクール入賞者等)	
❖ 2019 オープンキャンパス・学校説明会&体験レッスン	
❖ 2019 中高生のためのステップ・アップ・プログラム	
❖ 令和元年度 10月~12月 演奏会のお知らせ	
❖ 令和元年度 武蔵野音楽大学・附属高等学校 冬期講習会のお知らせ	
❖ 令和2年度(2020年度)入学試験要項ならびに各種資料の請求について	

武蔵野音楽大学大学院

博士前期課程・博士後期課程

武蔵野音楽大学

武蔵野音楽大学別科

武蔵野音楽大学附属高等学校

武蔵野音楽大学第一幼稚園

武蔵野音楽大学第二幼稚園

武蔵野音楽大学武蔵野幼稚園

附属音楽教室 江古田・入間・多摩

❖ 発行 ❖



学校法人 武蔵野音楽学園

江古田キャンパス ●〒176-8521 東京都練馬区羽沢1丁目13-1
TEL.03-3992-1121 (代表)

入間キャンパス ●〒358-8521 埼玉県入間市中神728
TEL.04-2932-2111 (代表)

バルナソス多摩 ●〒206-0033 東京都多摩市落合5-7-1
TEL.042-389-0711 (代表)

<http://www.musashino-music.ac.jp/>    

2019年10月1日発行 通巻第131号